

Title	R・ニーバーの現代的意義と限界（ラヴィン教授への応答）
Author(s)	千葉, 真
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3 : 34-37
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5126
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

R・ニーバーの現代的意義と限界

千葉 眞

I. ラヴィン教授から「審判、自由、責任」について貴重なご講演をしていただき、感謝いたします。スタンレー・ハワースの近年のラインホルド・ニーバー批判（世俗の人々にとってもキリスト者にとっても説得力を失っている）というのは、ラヴィン教授の指摘にあるように、賛成しがたいものである。ハワースは、カール・バルトに対して、ラインホルド・ニーバーに対しても、これまで批判的な応答をしてきたが、いわば建設的な応答であって、そこには傾聴すべき点が数多くあり、私自身、そこから学ぶべき点が多くあった。しかし、近年の批判は建設的批判とはいえないように思われる。

II. 今日、暴力やテロリズムや国家テロリズムが暗躍している時代に、ニーバーの権力の傲慢（ヒュブリス）——政治権力であれ、宗教権力であれ、軍事権力であれ——に関する批判は重要なものとなってきた。その意味で、多くの「政治的誘惑や熱狂主義」に対する警告と予防と解毒剤としてのニーバーのキリスト教現実主義には重要な意義があり、その重要性は今日ではますます増大していると思われる。本書一七—一八頁でのラヴィン教授の指摘は説得力がある。政治勢力（権力者と体制転覆者の双方）に自己抑制、自己制限、自己限定を要求するニーバーの固有の視点論点は貴重で

あるばかりでなく、今日、従来にもまして強く要請されていることは言うまでもない。

Ⅲ. さらに歴史の神学がニーバーの神学と政治思想を統合している柱であるというラヴィン教授の指摘(本書一八一―一九頁)も貴重である。その際、ニーバーの歴史の神学とは審判と自由の弁証法(あるいは弁証法的緊張)から成立しているものであり、その背後には *An Interpretation of Christian Ethics* (1935) で初めて展開されたようなキリスト論が土台になっていると思われる。そしてこのキリスト論が *The Nature and Destiny of Man, 2 vols.* (1941 and 1943) に帰着し、とくに第一巻では弁証法的な人間の神学、第二巻で同じく弁証法的な歴史の神学に結実しているように思われる。そしてラヴィン教授が指摘されているように、キリスト論的な歴史の神学は、今度は彼の政治思想や政治評論の基礎となつていくと考えられる。本講演は、審判、自由、責任というニーバー神学ないしニーバー倫理学のトリアーデについて、多くの貴重で精緻な論点や洞察や評価を提示してくれている。

Ⅳ. 私は従来から、ニーバーの一九三〇年代から一九四〇年代初めにかけてのいわば「預言者宗教」(prophetic religion) に依拠した「下からのキリスト教現実主義」(Christian realism from below) と「混合経済と勢力均衡に依拠した戦後の保守的な「上からのキリスト教現実主義」(Christian realism from above) とは同じものかという疑問を持っていた。今でもその疑問は消えていない。それらはやはり別物だという印象を禁じ得ない。むしろ一九五〇年代末から一九六〇年代にかけては、マーティン・ルーサー・キング牧師の公民権運動、社会正義とアフリカ系アメリカ人の人権や公民権擁護の闘争のほうが、前期ニーバーのラディカルな「下からのキリスト教現実主義」を、本家本元のニーバー自身よりもよりよく体現していたように思われてならない。その点で「権力に関する現実主義が審判を歪める例」としてニーバーの公民権運動に対する懸念を、ラヴィン教授が示しているのは同意できる(本書二二―二四頁)。

この時期にニーバーが書いたものには、解放への希望よりも白人の巨大な抵抗を引き起こす危険のほうに焦点を合わせているように見えるものがある。政治的現実主義者には、変化への期待は小さく、変革の過程は遅々として進まず、なお数世代を要するように見える（本書二二―二四頁）。

V. ニーバーの「キリスト教現実主義」はなぜ後期になつて保守化をたどつたのであろうか。勢力均衡論に大きく依存することになつたことが一因であろう。同時に思慮深い政治的保守主義者ロバート・ニスベットが認識したようなアメリカの国家権力の変容に、後期ニーバーの勢力均衡の「上からのキリスト教現実主義」の保守主義は洞察を欠き、無頓着であつたことを挙げるべきよう。 *The Present Age: Progress and Anarchy in Modern America* (1988) においてニスベットは、戦後アメリカの国家権力の急激な拡大に注目し、アメリカの建国の父たちがそれを見たら、度肝を抜かれるであろうと述べたことがある。戦後アメリカの国家権力の専制化について、ニスベットは思慮深い保守主義の立場から批判しているのである。後期ニーバーの保守的な「キリスト教現実主義」は、この現代アメリカの国家権力の専制化について、ニスベットが示したような洞察をいささか欠いていた印象がある。シェルドン・S・ウォリンは、ラディカル・デモクラシーの立場から、ニスベットに類似した認識を示している。 *Politics and Vision, expanded edition* (2004) において、ウォリンは、二度の全体主義体制との対峙と対決（①ドイツと日本、②ソ連）を通じて、アメリカの政治体制は、「自由民主主義体制」という名称の下で実質的な変容を被ることになり、全体化する権力を各方面において行使する新しい覇権主義体制、すなわち、「スーパーパワー」へと転化してしまつた (p.xvi) と述べている。もちろん、こうしたウォリンの観察は二二世紀初頭のものだが、すでにこうした事態は米ソ冷戦下で進んでいたと見るべきであろう。すでにアイゼンハワー大統領がアメリカの「軍産複合体」の存在について語つたのは、大統領を離任する一九六一

年一月のことであった。

ラヴィン教授は、次のオリヴァー・オードノヴァンの指摘を引用している。「偶像礼拝がまったくない政治社会はありえないという理解は、ラインホルド・ニーバーの最も永続的な洞察であった」（本書二〇―二二頁）。このオードノヴァンの指摘は的を射たものといえよう。今日の政治的偶像礼拝はかつてのドイツのヒトラー、日本の天皇帝ファシズム、ソ連のスターリンなどではないであろう。カリスマ的な政治的指導者が政治的偶像礼拝の対象となった時代は、一部の例外を除いて、たしかに過ぎ去りつつあるのかもしれない。しかし、今日、世界には政治的偶像礼拝がないわけではない。それは構造化されたものとして威力を発揮している。今日、グローバルに展開している金融資本主義体制（国際規模の政治経済体制と言ってもよい）は、現代のグローバル規模の集合的偶像礼拝の事例ではないだろうか。これがグローバルな規模で貧富の差を構造的に拡大してきている。これは現代のグローバルな寡頭制的支配構造（オリガーキー）である。私たちは三・一一福島放射能汚染の出来事を通じて、戦後日本の原発事業における「政・官・財・学・報」の「原子力村」というオリガーキー構造に関して白日の下に曝されるといふ国民的経験を持ったのである。現代世界は、こうしたテーマや問題圏についてニーバーが示してくれたきわめて適確で思慮深い権力の批判的考察（神学的・歴史的・社会的・政治思想的検討）が強く要請されている時代であることには相違ない。